



※この物語はフィクションです。



## 「日向忍者学校」教科書の内容

### 「日向忍者の掟」 (日向忍者学校編纂：「忍術学」 2 ページより)

---

「マの書」の巻物には、禁術が記されている。

**絶対に見てはならない。使ってはならない。**

### 「悪しき忍者 安芸 百乃次」 (日向忍者学校編纂：「忍術学」 14 ページより)

---

日向の里に住んでいる者で「百乃次（もものじ）」の名前を知らない者はいないであろう。

百乃次は日向の忍者でありながら、掟を破り「マの書」の禁術を使って、日向の里に大変な危険をもたらそうとした罪人である。

百乃次は第二次忍大戦時には、同盟国側へ日向からの支援要員として派遣される程の優秀な忍であった。

大戦でも優秀な戦績をあげ、里に戻ってからは大戦の「功労者」として手厚くもてなされていた。

百乃次は、元々、他人より目立つことが好きな性分であった。

大戦からずいぶんと月日が流れ、周囲からもてなされなくなった百乃次は、「自分のおかげで平和な暮らしが出来ているのに、感謝していない」と、里の人々をうらむようになる。

・・・「マの書」の禁術を使用しよう考えるのに、たいして時間はかからなかったと言われている。

これらの百乃次のたくらみを、禁術使用の一步手前で発見し捕縛したのが、当時、忍術学校指導教官をしていた幻五郎（げんごろう）先生である。

幻五郎先生は、これらの功績が称えられ、三来図の国の役に就き、その後この国の為にご尽力された。

## 「忍者の生まれ」 (日向忍者学校編纂：「忍術学」 54 ページより)

---

かつて、この国はたくさんの小国から成り立っていた。

元々、人々は農耕民族であり、自らの暮らしは自らの知恵と工夫、努力によって豊かなものとし、日々の暮らしにおいても、誰もが助け、支えあい、平和な日々を送っていた。

そんな暮らしの中、各国は平和な日々を守ることを目的に自警団を発足する。発足当時の自警団の任務は「守ること」であり、主に自国の秩序や天災等の被害から人々を守ることであった。

\* \* \*

しかし、時代が流れにつれ、自国の繁栄のために他国を侵略する国が現れ始める。

それに伴い、各国の自警団の任務も他国からの侵略を防ぐことの他、「やられる前にやっつしまえ」との考え方から、他国と戦う軍隊のような組織に変化していく。

しかし、どの国も自国の自警団はあくまで「自分たちを守るための組織」と言い張った。

背景には表だって「軍隊」と認めてしまうと、周りの全ての国を敵に回してしまう恐れがあったためであった。

他国との緊張状態が続く中、ひそかに誕生したのが「忍者部隊」であった。

\* \* \*

忍者たちの主な任務は、「敵国の情報収集」と「情報の伝達」であり、敵国に忍びこんで行う諜報活動は大変な危険が伴った。しかし、各国の小規模な侵略戦争の中、忍者の役割はさらに大きなものとなっていき、どの国でも忍者部隊が編成され、いつしか忍者部隊の強さが、国の強さと言われるまでになっていった。

情報収集や伝達だけが任務のはずだった忍者たちは、国同士が表だって戦えない状況から、次第に忍者同士が戦う代理戦争へと発展していく。これが後に言う、第一次忍大戦である。

この戦いで名が知れ渡ったのが、曾鑄の国の隠れ里「根来(ねごろ)」と、三来図の国の隠れ里「日向(ひゅうが)」であった。

この戦いでは、曾鑄の国とその連合国が勝利を収め、三来図を始め、負けた側の国は領地の大半を失うこととなる。

\* \* \*

この後、しばらく戦乱のない世の中が続くが、曾鑄の国に反発する国が増え、曾鑄の国と周辺の実同盟国が戦うこととなる。

これが、第二次忍大戦である。

戦いに勝った同盟国は、戦乱を二度と起こさないために平和条約を結び、各国は平等で対等の関係となった。

今では各国同士の貿易や交流も行われるようになっていく。

忍者は、当初の忍者としての役目は終えているが、その高い能力が必要とされ、今では自警団を始め様々な業種に派遣され、活躍している。

